

報道各位

TOKYO FM 開局 46 周年記念式典挨拶 **(代表取締役社長 千代 勝美)** ～2016年4月26日(火) 午前10時30分 TOKYO FM ホール～

株式会社エフエム東京は、2016年4月26日(火)午前10時30分より、TOKYO FM ホールにて、TOKYO FM 開局 46 周年記念式典を実施し、代表取締役社長・千代勝美が、以下の挨拶を述べました。

◇代表取締役社長・千代 勝美 あいさつ◇

開局記念日を祝う前に、今回の熊本地震で被災された皆様に心よりお見舞い申し上げますと共に、一日も早い復興をお祈りしたいと思います。14日(木)の夜、震度7の一報を受けて、当社は東日本大震災の教訓を活かし、即座に災害報道特番編成を敷き、エフエム熊本と緊密に連携し被災者の立場に立った報道を心掛けました。ツイッターでは「5年前の東日本大震災の時も元気づけられたこの放送を思い出して聴きました」、「TVは淡々と被害状況を伝えるので怖くなってくる。ラジオは熊本のリスナーと電話でつないでくれて安心する」など、3.11の我々の活動が今も活きていることを伝えてくれました。

当社はFM放送においても、V-Low マルチメディア放送 i-dio においても、国民の安全・安心に貢献できる放送活動を今後も強化していきます。

さて、本日、開局記念日にあたり改めて原点に戻り、当社の理念である「感動を提供し、共感を得る」ということの意味を自らに問いかけて、全員が仕事に対する向き合い方を再確認したいと思います。当社の原点は、新たなものへのたゆまぬ開発精神とチャレンジの繰り返しであります。1958年、実験局として東海大学代々木校舎からわずか1KWの出力でスタートしたFM放送は、受信機もないところから、諸先輩方の一途な使命感と開拓者精神により、今日の礎を築いて頂いたのであります。今、まさに i-dio が同じ時を迎えている訳です。

1970年代はFM大阪、FM愛知、FM福岡と4局で10年余りの間FM放送のポジショニング創りに取り組み、81年にJFNが発足、翌年全国で開局ラッシュが始まり、現在のJFNネットワークが形成されたわけですが、このネットワークの価値を、全局一丸となって、より一層向上させて行きたいと思えます。

振り返りますと、1990年にステーションネームをFM東京から「TOKYO FM」に変更し、企業理念を「感動を提供し、共感を得る」と定め、ステーションキャンペーン「アースコンシャス～地球を愛し、感じるこころ」を打ち出しました。「感動を提供し、共感を得る」理念の実践に徹し、ステーションのアイデンティティを明確化し、リスナーとのコミュニケーションを徹底追求した結果、再び聴取率 No.1 を取り戻したのであります。その様な中、新たに、95年に見えるラジオ、97年にはD-GPSを開始し、i-dioに至る先駆的ビジネスを実現するなど、当社独自の価値を産み出してきました。

しかし、インターネットの出現が、メディアの構造変革を起こしました。メディア大改革、近年のメディア環境は激しいスピードで変化しており、現在は、第4次産業革命といわれるIoTの時代であります。過去の延長線上に未来はないと言われる程、メディアの世界は根本的な変革を余儀なくされています。i-dio 事業では、真に放送と通信の融合ビジネスを具体的に実現することが、この激変の時代に淘汰されるのか、淘汰する主役となるのかの大きな転換点となります。

2005年、アースコンシャスに続くもう一つのステーション・メッセージ「ヒューマンコンシャス～いのちを愛し、つながる心」を掲げて10年が過ぎましたが、現代においてますますこの行動規範はその重要性を増しています。我々メディアは常に時代と共にあり、時代をリードするメッセージを発信し続けることで、アイデンティティを強固なものにして行かなければなりません。

放送の世界では今日、世界的にデジタルへのシフトが加速しています。当社も基盤となる FM 放送事業を強固なものとした上で、i-dio はもとより、デジタル・オーディオ・アド事業にもいち早く参画し、新たなデジタルビジネスを生み出していきます。常に新しいメディア・ポジショニングを創り出して行く、従来とは違った、他に比類ない独自の考え方や発想で、新たなサービス開発に取り組んでいきます。それを支えるのは、グループ各社の皆さん一人一人です。当社の最大の資産は人材であります。

今期は「人材育成」を最重要テーマとして、人事制度改革に取り組み、「感動を提供し、共感を得る」企業理念の実践を推進して行きたいと考えております。どうぞ、自由な心と自由な発想で、新しい文化を創り出すことへ、この開局記念日に、改めて皆さんと共に誓って、私の挨拶とさせていただきます。

以上